

## 1. 東方の占星術の学者たち

ここに登場する占星術の学者とは、魔術と占いが混在しているとはいえ、近代天文学にまさるとも劣らない高度な観測技術によって、さまざまな天体現象を予測する人たちでした。それにより洪水や飢饉、不吉な前兆とされる天体現象を予測したり、農業と政治の基礎となる暦を作成する人たちでした。また戦争の可否や条約締結といった政治的な事柄を王に進言し、吉凶を予測して災いを防ぐなど、政治に甚大な影響力と発言力をもつ政策助言者でした。彼らは東の方、ベルシャからやってきたと考えられます。ユーフラテス中流シッパルに天文台があり、紀元前7年に木星が魚座付近で土星に大接近することも、あらかじめ予測され、それが5回も観測されたという記録が粘土板文書で残されています。そこで彼らは「東方でその方の星を見たので、拝みに来た」のでした。こうしてベツレヘムで幼子イエスと対面した学者たちは、その幼子にひれ伏して礼拝をささげます。「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた」（11節）。「拝む」という言葉は、床にひれ伏して礼拝する、「跪拝する」ということで、もっぱら神に対して用いられる言葉です。それが幼子にあてはめられたことは驚きであり、それによってこの方が神ご自身であることを明らかにしようとしています。

支配者の登場が星によって示されることは、旧約聖書で預言されていたことでした。民数記24章17～19節に「ひとつの星がヤコブから進み出る。ひとつの笏がイスラエルから立ち上がり、モアブのこめかみを打ち砕き、シエトのすべての子らの頭の頂を砕く。……ヤコブから支配する者が出て、残ったものを町から絶やす」とあります。また異邦の王たちがイスラエルの支配者の許に集まり、崇めることについては、詩編72編10、11節で「タルシシュや島々の王が献げ物を、シェバ

やセバの王が貢ぎ物を納めますように。すべての王が彼の前にひれ伏し、すべての国が彼に仕えますように」と詠われます。こうして王をはじめとする異邦人たちがイスラエルの支配者に対して礼拝をささげるために集まり、その方に献げ物をすることが預言されていて、この占星術の学者たちの来訪は、その預言の成就と考えられました。イザヤ60章1～6節でも、「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。見よ、闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかしあなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる。国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射出するその輝きに向かって歩む。……そのとき、あなたは畏れつつも喜びに輝き、おののきつつも心は晴れやかになる。海からの宝があなたに送られ、国々の富はあなたのもとに集まる。……シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えて来る」。こうして、「黄金と乳香」が献げられることが預言されています。

## 2. 黄金、乳香、没薬

ここで彼らが主イエスに献げたのが「黄金、乳香、没薬」でした。「黄金」が献げられたとは、主イエスが王であることをあらわします。王である方にもっともふさわしい最上の贈り物、それが黄金でした。「乳香」は、香として焚かれる香りの良い白い樹脂で、砕いて燃やすとバルサムのような香りがします。非常に高価で金と同等に取り引きされ、神殿で用いられたもので、神の前へと立ち上っていくわたしたちの祈りをあらわすものとして神に献げられるものでした。ですからそれは主イエスが神であられることをあらわします。しかしそれだけではなく、「没薬」が献げられます。没薬は、スミルナと呼ばれる灌木から取れる、香りの良いオレンジ色の樹脂で、やはり非常に高価なもので、宗教儀式や防腐処理に用いられたものでした。実はこの没薬がもう一回登場します。それは主イエスの死の場面、十字架と埋葬の場面で

す。主イエスが十字架で死に、遺体を取り降ろして墓に埋葬する場面、ヨハネ19章38～40節で「その後、イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちのを恐れて、そのことを隠していたアリマタヤ出身のヨセフが、イエスの遺体を取り降ろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトが許したので、ヨセフは行って遺体を取り降ろした。そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持ってきた。彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ」とあります。このように没薬とは、死者を埋葬するときに用いる薬ですから、赤子に贈るにはいささか似つかわしくない代物です。しかしそれがこの幼子に贈られたことに、深い意味があります。

このとき主イエスが、彼らにどのようにして迎えられたか定かではありません。彼らが「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた」とあるだけです。しかし主イエスが占星術の学者たちの礼拝を受ける前、羊飼いたちの礼拝を受けられていました。そのとき主は飼い葉桶の中で寝ておられました。天使は「あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」(ルカ2:12)と語りました。ここでは主イエスは飼い葉桶の中で寝ています。実はこの「寝ている」という言葉も、もう一回出てきます。それはどこかというよりは主が十字架で処刑されて、墓に葬られる場面です。これは「横たえられる」という言葉で、「墓の中に納めた」(ルカ23:53)とか「遺体を置いた」(マタイ28:6、ヨハネ20:12)と訳されています。つまり飼い葉桶に寝かされた主イエスは、やがて墓に横たえられ、墓に寝かされるということです。没薬はそのために備えられたものでした。こうして「寝ている・横たえられる」という言葉で、飼い葉桶と十字架とが一つのものとして指し示されているのです。それはやがてこの主イエスが十字架で死ぬ、そのことの備えとして献げられたものだということでした。主イエスはどのようにお生まれになったか、それは死ぬために生まれたということです。人間は誰でも一度は死

ぬものだと誰もが考えるでしょうが、そのように自然に死ぬというのではなく、暴力的に殺され、処刑されて死ぬ、そのことを暗示するものでした。どうしてか。私たちの罪のため、私たちの身代わりとして十字架で死ぬために、わざわざお生まれくださった方だということです。そこにクリスマスを喜び祝う意味があるのです。ここに、私たちが救うためにご自分の命を犠牲として差し出してくださった、主の貴い愛があらわされているのです。

### 3. 最も最上のものを献げる

ここで占星術の学者が主イエスに献げた「黄金、乳香、没薬」、これらはいずれも非常に高価なもので、彼らが献げられる最上のものでした。これほどに高価で最上のものこそ、王であり、神である主イエスに献げるにふさわしいと考えたからでした。それはそうなのですが、実はこれらは彼らの商売道具でもありました。この「黄金、乳香、没薬」によって彼らは星占いをしていた、その道具を主イエスに献げてしまったということでもあります。別の見方をすれば彼らはこれまでの仕事を続けられなくなるということでもあります。つまり彼らはこれによってこれまでの占星術をやめて、その仕事を放棄してしまったということもできるわけです。それはつまり彼らが自分のこれからの人生を主イエスに献げたということです。自分の人生を献げる、これ以上の贈り物があるでしょうか。

そしてそれは彼らがもう二度と星占いはしない、これまでの古い生き方には戻らないということの意味していました。主イエスを王とし、この方を神として、その導きに従って生きていく者には、もはや星占いは必要ないからです。これまで自分知恵と技術、経験と実力に頼って生きていました。しかし主イエスを自分の主、王としたときから、その必要もなくなりました。これからは、この方の導きに従って生きていけば良いからです。占星術の学者たちは、自分の持てる最高・最上のものを主イエスに献げていきました。それは自分自身でした。私たちは、この方を前にして、何をお献げしていくのでしょうか。(三川栄二)

**(単元のねらい)**

占星術の学者たちが主イエスに献げた贈り物の「没薬」の意味を掘り下げます。それは主イエスが私たちのために十字架にかかって死んでくださった備えとされたものでした。このように私たちのために命を献げてくださった方に、私たちは何を献げていくかを考えさせてほしいと思います。

**最上の献げもの**

今お読みしました聖書は、皆さんもよく知っているクリスマスの物語の一つです。主イエスが生まれたのは「ヘロデ王の時代」とされています。ヘロデは紀元前4年に死にますから、主イエスの誕生はその前ということになります。その誕生に際しては不思議な星の出現があったことが記されますが、このヘロデの在位中にさまざまな天体現象が次々と起こったことが記録されています。まずは紀元前12年のハレー彗星の出現でした。その後紀元前7年には木星と土星が大接近し、5、9、12月には重なり合って見えたことが記録されています。紀元前6年2月には、これに火星が加わって、三つの惑星が一塊になって見えたことが確認されています。それは本当に息を呑むほど大きく光り輝いたに違いありません。紀元前5年には3～4月にかけて7日間ほど山羊座の近くに彗星があらわれ、夜が更けるにつれて南の空から西の方へと移っていくように見えたそうです。その1年後の紀元前4年3～4月にも、鷲座の方向に彗星があらわれたということでした。こうした出来事を考え合わせると次のように予想することができると思います。

まず紀元前12年のハレー彗星で、天変地異に対する関心が呼び起こされる中で、7年の木星と土星の大接近、さらには6年の火星も加わった大接近によって、パレスチナで重大なことが起こることが予測されます。そして5年に現れた彗星で、占星術の学者たちは、駆り立てられるようにしてパレスチナへと旅立っていった……。彼らはこう

した天変地異を観測する中で、「ユダヤ人の王」の誕生を予測したのでした。というのは木星は世界支配の星、魚座は終末時代、土星はパレスチナの星とされていたので、それはパレスチナに終末時代の世界支配者があらわれるということの意味すると理解されたからでした。占星術の学者とは、マジとも呼ばれ、近代天文学にまさるとも劣らない高度な観測技術によって様々な天体現象を予測する人たちでした。それにより不吉な前兆とされる日食や月食といった天体現象を予測して、洪水や飢饉を防ぐために働いていた偉い人たちでした。彼らは東の方ベルシャからやってきたと考えられます。今のイラン、イラクに相当する場所ですが、ユーフラテス中流シッパルに天文台がありました。そして紀元前7年に木星が魚座付近で土星に大接近することも、あらかじめ予測され、それが5回も観測されたという記録が粘土板文書で残されています。そこで彼らは「東方でその方の星を見たので、拝みに来た」というわけですが、これは決しておとぎ話ではなく、実際にありうることだったのです。

こうしてベツレヘムで幼子イエスと対面した学者たちは、その幼子にひれ伏して礼拝をささげます。11節の「拝む」という言葉は、床に体をこすりつけ、ひれ伏して礼拝するということで、それによって主イエスが神であることを明らかにしました。学者たちは主イエスを神として礼拝したのでした。この占星術の学者たちの来訪は、旧約聖書に預言されていました。イザヤ60章1～6節

に「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。……あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる。国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射出するその輝きに向かって歩む。……そのとき、あなたは恐れつつも喜びに輝き、おののきつつも心は晴れやかになる。海からの宝があなたに送られ、国々の富はあなたのもとに集まる。……シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えて来る。こうして、主の栄光が宣べ伝えられる」とあり、「黄金と乳香」が献げられることが預言されています。主イエスに「黄金」が献げられたとは、主イエスが王であることをあらわします。王である方にもっともふさわしい最上の贈り物、それが黄金です。「乳香」は、香として焚かれる香りの良い白い樹脂で、砕いて燃やすとバルサムのような香りがします。非常に高価で金と同等に取り引きされたもので、神の前へと立ち上っていくわたしたちの祈りをあらわすものとして神に献げられました。ですからそれは主イエスが神であられることをあらわします。しかしそれだけではなく、ここでは「没薬」が献げられます。没薬は、スミルナと呼ばれる灌木から取れる、香りの良いオレンジ色の樹脂で、やはり非常に高価なもので、防腐処理に用いられたものでした。この没薬、もう一回登場しますが、どこかわかりますか。主イエスの死の場面、十字架と埋葬の場面に登場します。主イエスが十字架で死に、遺体を取り降ろして、アリマタヤのヨセフが墓に埋葬する場面でこのように記されます。ヨハネ19章39～40節「そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持って来た。彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ」。このように没薬とは、死者を埋葬するときに用いる薬ですから、幼子にプレゼントするのはふさわしくない物です。しかしそれがこの幼子に贈られたことに、深い意味があります。

主イエスが占星術の学者たちの礼拝を受ける前、羊飼いたちの礼拝を受けました。そのとき主は飼葉桶の中で寝ておられました。実はこの「寝ている」という言葉も、もう一回出てきます。それはどこかというよりは主が十字架で処刑されて、墓に葬られる場面です。これは「横たえられる」という言葉で、「墓の中に納めた」とか「遺体を置いた」と訳されます。つまり飼葉桶に寝かされた主イエスは、やがて墓に横たえられ、墓に寝かされるというのです。没薬はそのために備えられたものでした。それはやがてこの主イエスが十字架で死ぬ、そのことの備えとして献げられたものだということです。主イエスは どうしてお生まれになったか、それは死ぬために生まれたということです。それは私たちの罪のため、私たちの身代わりとして十字架で死ぬためでした。そこにクリスマスを喜び祝う意味があるのです。ここに、私たちを救うためにご自分の命を差し出してくださった主の愛があらわされているのです。

ここで占星術の学者が主イエスに献げた「黄金、乳香、没薬」はいずれも非常に高価なもので、彼らに献げられる最上のものでした。高価で最上のものこそ、王であり、神である主イエスに献げるにふさわしいと考えたからです。同時にこれらは彼らの商売道具でもありました。この「黄金、乳香、没薬」によって彼らは星占いをしていた、その道具を主イエスに献げてしまったということです。つまり彼らはこれによってこれまでの占星術をやめ、その仕事を放棄してしまったということもできるわけです。それにより彼らは自分のこれからの人生を主イエスに献げたのです。自分の人生を献げる、これ以上の贈り物があるでしょうか。私たちは、私のために命を献げてくださった方を前にして、何をお献げしていきましょうか。

(三川栄二)

---

[今週の暗唱聖句]      ローマの信徒への手紙 12章1節

自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。

---

## 〈ねらい〉

ワークをしながら、物語を振り返る。私たちも主に献げて生きる者へと導かれたい。

## 〈ワーク〉

☆東の方から来た学者たちは、何にみちびかれてやってきましたか。

☆学者たちはイエス様に何をささげましたか。

…… 王のしるし

…… 死体にぬる薬  
(十字架の死に備えて)

…… 神にささげる祈りを表す  
(燃やすとよい香りがする)

☆学者たちは何をしにエルサレムにやって来たのですか。

☆あなたがイエス様にささげたいと思うものは何ですか (物でなくてもよい)。

☆救い主はどこで生まれると<sup>よげん</sup>預言されていきましたか。

→参考になる絵本「アルタバンのたび」(いのちのことば社) アルタバンが献げたものとは？

☆ユダヤ人の王が生まれると聞いて、困ったのはだれでしたか？

## 〈ピングゲーム〉

①白紙のカード(名詞ぐらいの大きさ)を30枚ほど用意する。(100円ショップにある)

②カードにクリスマスに関連する言葉を一つずつ書く。(25以上にはなるように)

(例) ツリー・ひいらぎ・リース・星・マリア・ヨセフ・天使・キャンドル・ケーキ・ヘロデ・インマヌエル・オーナメント・雪・ひつじかい・飼い葉おけ・ベツレヘム・黄金・乳香・もつ菜・アドベント・プレゼント・リボン・おとめ・光・ベル・もみの木・長ぐつ・ポインセチア・みどりご・平和の君・永遠の父・力ある神・驚くべき指導者・ダビデの子・馬小屋・クランツなど。

☆それはなぜだと思いますか。

③各自が別の紙に25個のます目を書き、カードの言葉を各ますの好きなどころに書く。

④カードをよくきり積み重ねて裏返し、中央に置く。カードをめくり、出てきた言葉のます目に○をつける。5つそろったらピング。

☆幼子(イエス様)にお会いした学者たちは何をしましたか。

( ) 赤ちゃんをだっこした。

( ) ひれふして<sup>れいはい</sup>礼拝した。

( ) おもちゃで<sup>あそ</sup>遊んだ。

⑤ピングになった人のために小さなプレゼントを用意しておく。